



TITLE:

追憶文財部先生の追想

AUTHOR(S):

岡崎, 文規

CITATION:

岡崎, 文規. 追憶文財部先生の追想. 經濟論叢 1940, 51(2): 239-241

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131420>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府_{の發展性}……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦
岡崎文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

財部先生の追想

岡崎 文規

○

ある日、私は先生のお伴をして彦根水産試験所へ行つた。世間に有りがちな、單なるご見學をなさる位に思つてゐたところ、たしか琵琶湖の鮎のことについてであつたやうに記憶するが、所長にいろ／＼と極めて専門的な質問をされたので驚ろいた。私のやうな門外漢が驚ろいたのではどうと言ふこともないが、所長も先生の水産學に對するご造詣の深さに驚ろいたらしく今度は、アメリカの鱒やカニについて所長からいろ／＼の質問が出た。先生は其の質問に詳しく答へられ、そして多くの文獻さへ舉げられた。先生は統計學の權

追憶文

威であり、廣く社會科學についても深き學識をもつてゐられたことは人の周く知つてゐる所であるが、水産學なんかにも並々ならぬ知識をもつてゐられたのである。

○

ある日、先生は「この愉快な答案を見給へ」と言はれた。話はいかうである。統計學の試験の答案を書いた一學生が「無邪氣」の「邪」と言ふ漢字を忘れて、「無〇氣」と書いたのだが、その飾り氣のない書振りが先生のお氣に入つたのである。その時には、かうしたさいなことがからも、先生が人の心の純真さを讀み取られ愉快がられるお心持を十分に會得することが出来なかつたが、ある夏の日、先生が私の宅へお越しになつて雑談をしてゐるところへ、まだ幼稚園にも上つてゐない私の子供がよち／＼とやつて來た。先生が「この次にはいゝものを持つて來て上げようね。何が欲しい？」ときかれた。すると子供は即座に「これ！」と言つて、先生の前に置いてあるサイダーのコップを指した。先

生は「可愛いこと言ふね」と言つて、カラ／＼と笑はれた。先生があんなにも愉快さうに笑はれたお顔を、かつて見たことがなかった。これこそは純眞さと無邪氣さを愛されるお心持の輝きであつて、その時、私は先生には良寛和尚と相通するほゞ笑まじき性格をもつてゐられるのをしみ／＼と感ずることが出来た。

○

私の留學中、先生は留守宅の子供達にしば／＼お菓
子や玩具、衣類までも贈りとゞけて下さつたさうだ。
佗しく留守居をしてゐる子供たちを慰めて下さる溢る
ゝやうな、そのご慈愛を、私はどれほどか辱なく感じ
たことか知れなかつた。しかし私ははる／＼と殊更ら
しいお禮狀を差上げなかつた。さう言ふことをするの
を先生は好まれないやうな氣がしたからである。先生
のお世話になつた人は誰でも深く身にしみて感じてゐ
ることゝ思ふのであるが、先生はいつも蔭で親切をつ
くして、他人に語られるやうなことは決してなさらな
かつたばかりではなく、本人にさへも知らせようとは

されなかつた。而と向つてお禮なんか言はれることを
好まれなかつたと、私は信じてゐる。まことに床しいご
性格であつた。

○

先生にはいろいろ随分失禮なことを申し上げたこ
ともあるが、めつたにいやな顔をされたことがなかつ
た。たゞ一度、先生のご機嫌を損じたことがある。

それは何んでも古い書畫のことについてお話をした
時のことであるが、私はうっかりと「よい、ほり出しも
のをお見つけなさいましたか」と言つてしまつた。さ
う言つた瞬間、しまつたと氣がついたが、案の定「い
やな言葉だね」と言つて、先生はとても不快な顔をさ
れた。なるほど、「ほり出しもの」と言へば、相手が無
知であるのに乗じて、不當の利益をむさぼることであ
る。先生はそんなあまましいことをするのをいさぎよ
しとされなかつた。兼ねてから先生のご氣象を知り抜
いてゐる筈の私が、不用意のあやまちとは言へ、つま
らない失言をして、先生にご不快の感を與へたことを

甚だ申しわけなく思つた。

○

それは晴れ渡つた秋の日のことであつた。私は先生と彦根城のほとりを歩いてゐた。

先生は「こんな静かなところでゆつくりと本を讀んで暮したい」としみぐ言はれた。

「京都も静かではよいではありませんか」と申し上げると、「いかん、いろ／＼とうるさいことばりで。

しかしいま、職を退くわけにもいかんし」と言はれた。教授の仕事も、先生には俗界の俗事に過ぎなかつたであらう。

「その内にご停年ですから、そしたら彦根へお移りなさると……………」

「うん」と、先生は答へられた。

先生は心しづかに本を讀み、思ひに耽り、世を外なご生活をなさりたかつたにちがひない。——ことによると、あんなにもお酒を召し上つたのは、世のうさごとを忘れようとなさつたからかも知れぬ。李白の句

憶 追 文

に「古來聖賢皆寂寞」と言ふのがあるが、先生のこの世のご生活にもこの寂しさがつきまとつてゐたのではなからうか。

寂しいながらも、先生が待ちこがれてゐられたご生活の日を目の前にながめながら、いま、おかくれになつたことはまことに痛ましい。人の情として、先生がおかくれになつたことはたまらなく悲しい。が、しかしわれらは静かに涙をぬぐつて、いま、平和に眠つてゐらつしやる先生をさまたげないやうに。

(七月十二日夜半)